

貝塚養護学校に入学して 保護者

親の目から見るわが子は、年齢のわりには幼いところがあったり、そして、生真面目な性格で融通が利かなかつたりするので、校区の小学校では先生からも、わが子の成長は諦められていた状態でした。そして、いつの間にか「いじめ」の対象になっていました。低学年の頃は、筆箱の中身を隠されたり、体育の時間に頭の上から砂をかけられたり・・・でした。高学年になると「お前には死あるのみ」などと言った内容の手紙がありました。他にも沢山、思い出すのも嫌なことがいろいろありました。でも、どんな時にもわが子の口からは「誰々さんがこんなことをしてくる」などと言うことはなく、後になって、他の人から聞いてわかったことばかりでした。どうして言わなかったのか、それは自分が「あほ」やからみんながやってくる、しょうがないと思っていたようです。そのことを知った時には、もう親として失格、普段は子どもに偉そうなことを言いながら、何一つ子どもの気持ちを分かかっていなくて、とにかく学校にさえ行っていれば、親としては安心というだけでした。この時期は、子どものためということではなく、親自身が安心するために、子どもの気持ちをどこかに置いてきぼりにしていたように思います。そんなことから、少しずつわが子は自分自

身にどんどん自信というものがなくなり、他人との接触をできる限りしないようになりました。

そんな時に、この貝塚養護学校のことを知りました。この学校や寄宿舎での生活は、その子の短所をどうしようもなく悪い所なんて決めつけずに、その子の持っている良い所を見てくれて、子どものやる気を育ててくれる、今までに感じたことのない学校でした。子どもへの言葉かけにいつも温かさを感じています。わが子も学校の先生や寄宿舎の先生には、心を開いて話ができるようになってきました。子どもだけではなく親の方も、何だか癒されている感じです。

今まで、親子で悩み苦しんできましたが、今は、この学校や、この学校の先生方、寄宿舎の先生方、そして、この学校で知り合った保護者の方たちと出会えたことを、とても嬉しく思います。できるならば、このような学校が、もっと増えることを願います。このような学校を必要とする子どもたちは、きっとたくさんいるのだと思います。子どもたちのための学校、本当の自分を出せる場所、今の子どもたちにはそういう居場所が少ないのでは・・・。